

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：34528

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13094

研究課題名(和文) 文脈からみた「もの」を構成成分に持つ機能語の記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive Studies of Functional Words with 'mono' as a Component

研究代表者

松下 光宏 (MATSUSHITA, Mitsuhiro)

神戸医療未来大学・人間社会学部・教授

研究者番号：50846037

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：「もの」を構成成分に持つ機能語が用いられる文脈展開には2つのパターンがある。1つは話し手が異質・例外と認識する対象事態について述べている文脈において、対立する本来・通常の事態を注釈的に示すもので、もう1つは、話し手が異質・例外と認識する対象事態を示したあと、話し手の気づき、感想、背景事情の説明、否認などの話し手の評価・判断を表すものである。

これらの機能語全体に通底する性質として、対象事態が本来あるべきではない、通常と違っている、大部分と違っている、理解・納得しにくい、といった異質・例外の事態であるという話し手の評価・判断を表すという表現意図を持つことが挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、従来1文のみを分析対象として行われていた記述に対し、前後の文脈も分析対象とするという手法で「いつ、どのような文脈で、何のために用いるか」という点を明らかにする記述を行った。今後もこのような手法を用いて従来の記述よりも精緻な記述を目指す研究が広がっていくことが期待できる。また、本研究の成果は日本語教育の現場に直接還元できるものであり、その社会的意義は大きいと考える。

研究成果の概要(英文)：There are two patterns of contextual development in which functional words with 'mono' as a component are used. One is in a context in which the speaker is describing a target event that he or she perceives as unusual, and which annotatively indicates an ordinary event. The other is in a context where the speaker describes a target event that he or she perceives as unusual, and then expresses the speaker's evaluation and judgement, such as awareness, impression, explanation of background circumstances, denial, etc. The expressive intent common to all these function words is to express the speaker's evaluation or judgement that the target event is unusual, such as not as it should be, different from the usual, different from most, or difficult to understand or accept.

研究分野：日本語教育

キーワード：もの 機能語 使用文脈 用法 表現意図 異質・例外 本来・通常

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究での対象とする、「もの」という形式が単独または他の語と複合した形式で用いられ、文法的な機能を持つようになった機能語については、従来の研究では各機能語が用いられた1文のみを分析対象としているため、日本語教育での導入に重要な「いつ、どのような文脈で、何のために」という説明が十分ではなかった。

### 2. 研究の目的

本研究では、分析対象とする機能語について「いつ、どのような文脈で、何のために用いるか」という点を明らかにしたうえで、使用文脈の展開パターンからこれらの機能語の用法の体系化を行い、すべての機能語に通底する性質を論じることを目的とする。このことによって、日本語教育での学習者の理解や運用に寄与する記述を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究では、母語話者の実際の使用例をコーパスから抽出し、各機能語が用いられた1文だけでなく、その先行文脈や後続文脈も含めて分析を行うという方法をとる。具体的には、機能語が用いられた1文内や先行文脈、後続文脈に出現する語句(副詞的語句、主題の語句など)の調査し、他の類義形式には見られない特徴を分析する。そして、機能語が用いられた文が表す事態と、その前後の文脈において表される事態との関係や、文脈での用法を分析する。

### 4. 研究成果

まず、本研究の対象とした各機能語における研究成果を示し、その後、これらの機能語全体におよぶ研究成果を示す。

#### 各機能語の研究成果

はじめに「ものだ」の使用文脈の特徴と用法を再度示し、その後、逆接系の「ものの」「ものを」、順接系の「ものだから」「(よ)うものなら」「ものなら」「もの」「ものか」の順に、その使用文脈の特徴と用法を示す。

#### (1)助動詞「ものだ」の使用文脈の特徴

##### 【「ものだ」の使用文脈の特徴と用法】

「Pものだ」は話し手が異質・例外と認識する事態に対し、それと対立する本来・通常的事態Pを対比的に示す。そのあとに逆接の接続の語が続き、再度対象とする異質・例外と認識する事態が続く。「Pものだ」は注釈的に用いられる。

話し手が異質・例外と認識する事態をうけて、そのあとに「Pものだ」で話し手の気づきや感想などの評価を表す

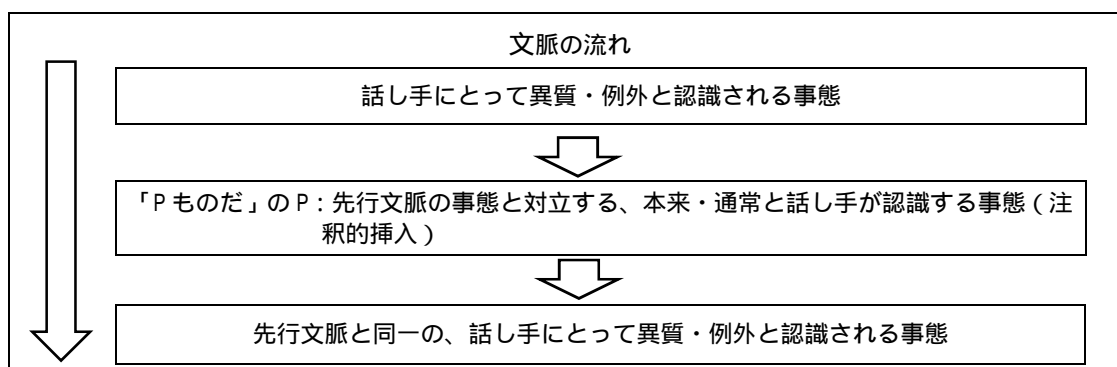


図1 「ものだ」の使用文脈の流れ

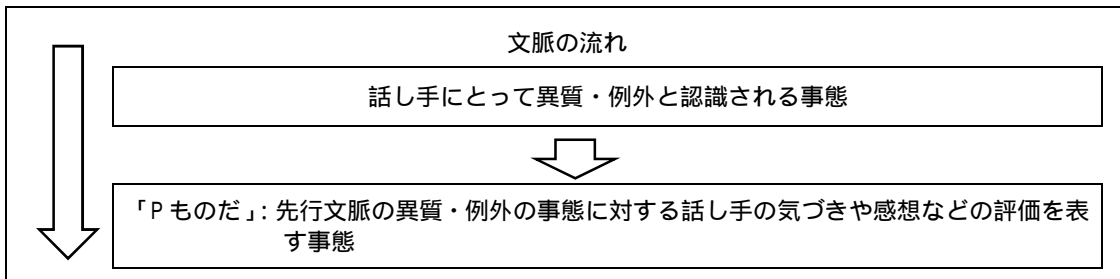


図2 「ものだ」の使用文脈の流れ2

(2) 「ものの」

【「ものの」の使用文脈の特徴】

「PもののQ」は、直前の文・節がPとは接続せずQと接続し、Qが直前の文・節と同じ主題についての事態を述べる文脈でよく用いられる。「Pものの」は直前の文・節とQが接続するなかで、直前の文・節とQが表す事態についてその文脈には沿わない一部のPという事態も存在することを注釈として表す。

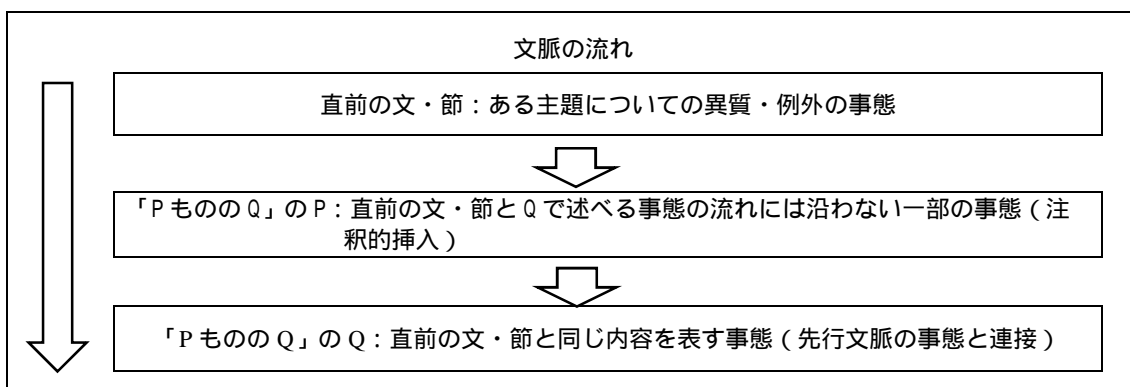


図3 「ものの」の使用文脈の流れ

(3) 「ものを」

【「ものを」の使用文脈の特徴】

「PものをQ」は、先行文脈とQがつながる文脈のなかで「Pものを」が注釈的に挿入され、先行文脈とQで述べられている異質の事実事態(十分に行われていない事態、行き過ぎたこと/不必要なことが行われている事態)が本来あるべき事態(事実事態よりも十分に行われている事態、行き過ぎたこと/不必要なことが行われていない事態)とは異なる、望ましくない事態であるという否定的評価を示すために用いられる。

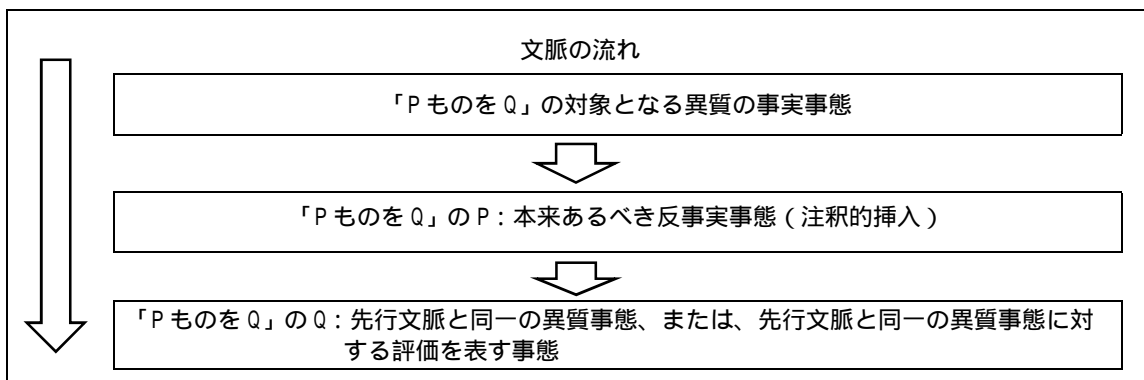


図4 「ものを」の使用文脈の流れ

(4) 「ものだから」

【「ものだから」の使用文脈の特徴と用法】

「PものだからQ」は、話し手が本来・通常であると認識する事態と異質・例外であると認識する事態とが対比的に表される文脈で、異質・例外の事態Qとそれを引き起こす異質・例

外の理由 P を示す文脈で用いられる。

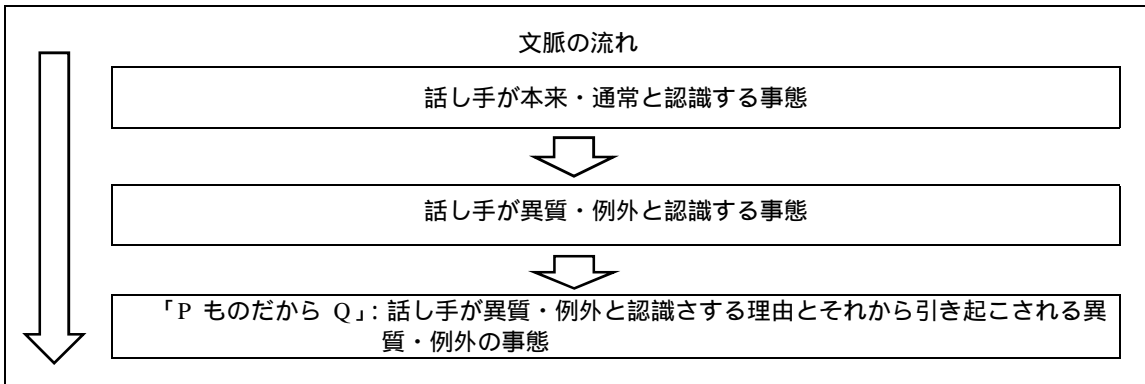


図5 「ものだから」の使用文脈の流れ

(5) 「(よ)うものなら」

【「(よ)うものなら」の使用文脈の特徴と用法】

「P(よ)うものなら Q」は、話し手が本来・通常であると認識する事態と異質・例外であると認識する事態とが対比的に表される文脈で、聞き手または話し手自身にとって想像、納得しがたい(異質・例外)と話し手が認識する事態について具体例や理由などを述べて敷衍するのに用いられる。

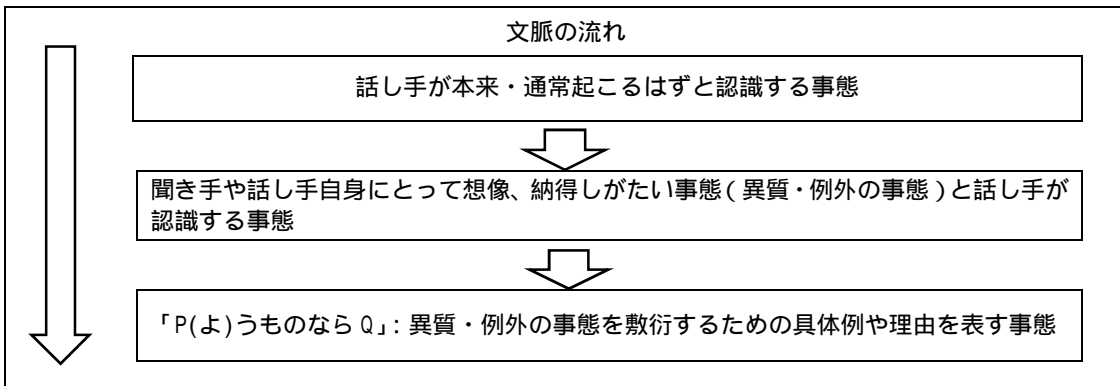


図6 「(よ)うものなら」の使用文脈の流れ

(6) 「ものなら」

【「ものなら」の使用文脈の特徴と用法】

「Pものなら Q」は、Pの本来実現が望ましいと話し手や聞き手が認識する事態と、それが実現しない/実現するはずがないと話し手が認識する事態(聞き手にとっては理解しがたい事態)が対立的に表される文脈で、実現しないと話し手が判断する事態について根拠など述べて敷衍するのに用いられる。

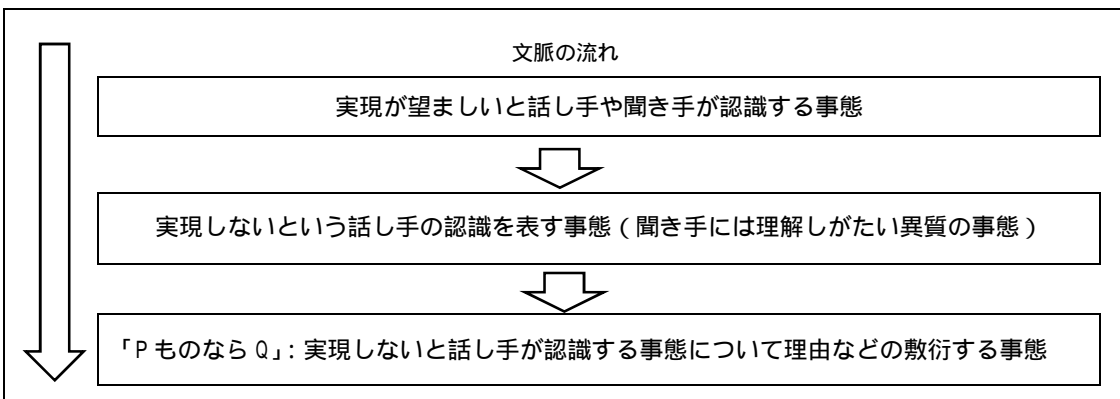


図7 「ものなら」の使用文脈の流れ

(7) 「もの」

### 【「もの」の使用文脈の特徴と用法】

聞き手には理解されにくいと話し手が認識する事態、または聞き手に理解されなかった事態について、聞き手に対しその正当性を示す根拠を提示する文脈で用いられる。

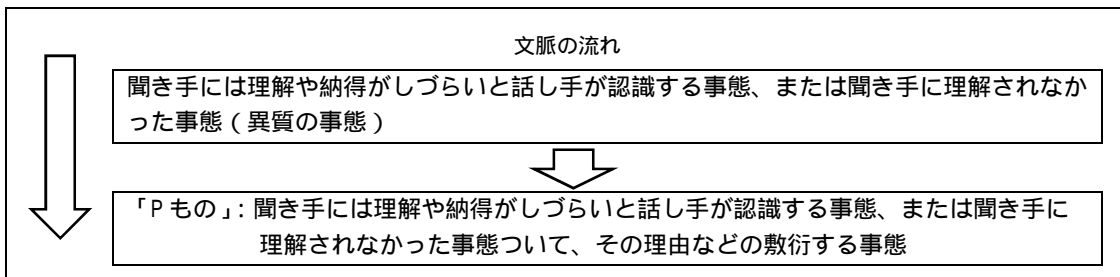


図8 「もの」の使用文脈の流れ

### (8) 「ものか」

#### 【「ものか」の使用文脈の特徴と用法】

「Pものか」は聞き手や他者から伝えられる、または、話し手自身が想像する、考えられない/考えたくない事態（異質の事態）に対し、その事態は考えられないものであり、成立しない（否定・否認）という話し手の評価を示すのに用いられる。

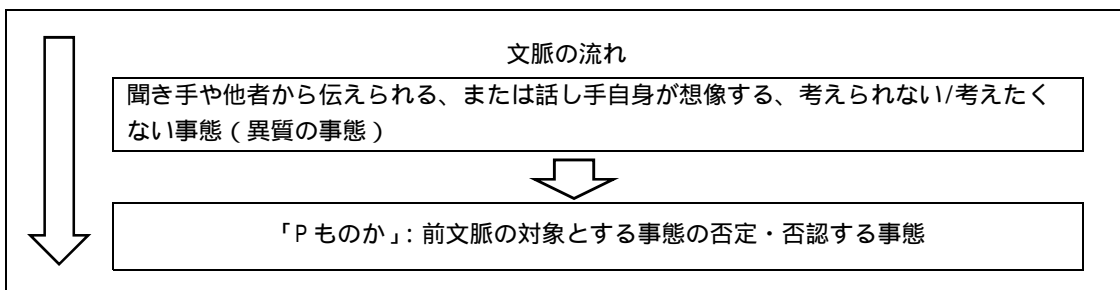


図9 「ものか」の使用文脈の流れ

### 研究全体におよぶ成果

各機能語の使用文脈の特徴と用法を機能語全体の体系として整理し、すべての機能語に通底する表現意図を述べる。

#### 【使用文脈の特徴と用法】

- ・助動詞「Pものだ」の の用法（逆接の接続の語が続く）と接続助詞「PもののQ」「PものをQ」は、異質・例外、または本来・通常と話し手が認識する対象事態に対し、Pでそれと対立する事態を対比的に示し、そのあとに再度異質・例外/本来・通常の対象事態が続くという文脈で用いられる。
- ・助動詞「Pものだ」の の用法（逆説の接続の語が続く）と接続助詞「PものだからQ」「P(よ)うものならQ」「PものならQ」、終助詞「Pもの」「Pものか」は話し手が異質・例外と認識する事態のあとに、その事態についての話し手の受け止めを表すという文脈で用いられる。その受け止めとは、気づき、感想、背景事情、否認などである。

#### 【すべての機能語に通底する性質】

対象とする事態が、本来あるべきではない、通常と違っている、大部分と違っている、理解・納得しがたい、といった異質・例外の事態であるという話し手の評価・判断を表すために用いられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松下光宏	4. 巻 22
2. 論文標題 接続辞「(よ)うものなら」の文脈における用法と使用文脈の特徴	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸医療福祉大学紀要	6. 最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松下光宏	4. 巻 13
2. 論文標題 接続助詞「ものを」の文脈における用法と事態の特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語/日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下光宏	4. 巻 23
2. 論文標題 問いかけ性を持たない反語形式「か」「ものか」の文脈における用法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸医療未来大学紀要	6. 最初と最後の頁 63-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下光宏	4. 巻 23(1)
2. 論文標題 接続助詞「のを」「ところを」「ものを」の対比性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 172-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------